

# だいいく通信 第四十五号 「春の号」

いあーわっ

新型コロナウイルスの感染は依然として収束しそうにありません。昨年来、わたくしたちの生活は大きく変わってしまいました。誰かと直接に会って、気兼ねなく話したり、一緒に食事をしたりすることのありがたさを痛感させられる毎日です。まだしばらくは我慢の日々が続きそうです。当神社でも引き続きできる限りの感染対策をしつつ、みなさまのお参りをお待ちしております。

社報「だいいく通信」第四十五号をお届けいたします。

今回の内容は、最近の当神社の話題、神社に関する豆知識をお伝えする「お宮あれこれ」、オリジナル・キャラクターたちが活躍する連載まんがなどです。お楽しみいただければ幸いです。

大國神社 宮司 大島資生



## 大國神社の今

今年のお正月明けに当神社のおみくじ機が不調となったため、業者に依頼して修理してもらいました。内部の機械をかなり細かく調整してもらい、現在は問題なく動いてくれています。

機械を修理に出している間、ご希望のかたには手指を消毒していただいたうえで、手動にておみくじを引いていただきました。ご不便をおかけいたしました。

ご参拝の折には、復帰した機械でぜひおみくじを引いてみてください。変わらず一回十円です。



## お宮あれこれ〜卯月の話〜

まもなく四月となります。四月は陽気も落ち着いてきて、暖かく、新しい年度が始まる月でもあります。陰暦四月は「卯月（うづき）」と呼ばれました。今回はこの「卯月」についてお話ししましょう。

「卯月」ということばの語源は諸説あるようです。最もよく知られているのが、「卯の花月」がつづまったというものです。卯の花というのはウツギの花（写真）のことで、色は白かピンクで5月から6月にかけて咲きます。「卯月」は陰暦による月名なので、時期に違いが生じています。ちなみに「卯の花」は夏の季語です。

かと思えば、いや、卯の花が咲くから卯月というのではなく、卯月に咲くから卯の花というのだ、という説もあります。また、十二支で「卯」は四番目だからという説、稲の種を植える月だから「植月」という説もあります。柳田国男は、「ウ」は「初（うい）」や「産（うむ）」に通じる音で、一年の循環の境目を卯月とするという古い考え方の名残だ」と述べているそうです。



卯月に行なわれる伝統的な行事でよく知られているのは「灌仏会（かんぶつえ）」でしょう。「仏生会（ぶっしょうえ）」とも言いますが、お釈迦様の生誕の日で、お寺では仏像に甘茶などをかける習慣があります。古くは、この日お寺に参拝した人はもらった甘茶を飲んだり、その甘茶で墨をすり、紙に「千早振る卯月八日は吉日よかみさけ虫をせいばいぞする」と記したそうです。この紙をお手洗いや台所に貼っておくと、虫よけになるといふ俗信があったようです。

さて、灌仏会は「花祭」とも呼ばれます。なぜそのような言い方をするのでしょうか。実は、この「卯月八日」は、もともとはお釈迦様の誕生会とは無関係に行われていた部分があるようです。修験道で峰に入る際の重要な行事として「華供（はなく）の峰」というものがあります。峰にいらっしやる神仏に感謝を捧げ、先達の遺徳に思いを馳せ、花を供える儀式です。この儀式のさらに根底には民間の習慣がありました。四月八日に山に登り、ツツジ・フジ・シヤクナゲなどを採って、里に持ち帰り、竿の先に結んで高く立てるといふ風習です。この時期に近くの小高い山に登って花見をする、花を摘むなどの行事は近畿地方・中部地方に長く伝わっていたようです。



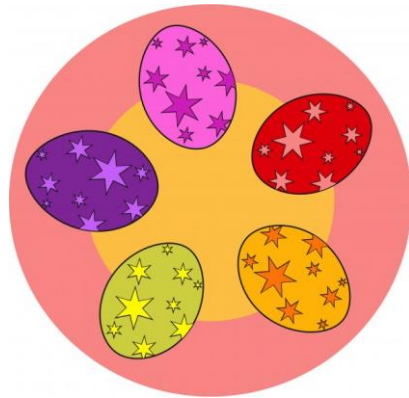
福島県には、卯月八日を神の日と呼ぶところがあつたようですが、この時期に山の神が里に下りてきて田の神となる、という意味合いでした。田の神は田植えの準備を始めるころ山から下りてしばらく逗留し、収穫を終えたころ山に戻ると考えられていました。このとき、山の神が田の神として里に下りる際の依り代が花でした。山で摘んできた花を高く掲げること、  
「田の神様をお迎えしましたよ」ということを示そうとしたわけです。加えて、山の神（田の神）というのは実は祖先の霊でもありました。山から花を介して祖先の霊をお迎えし、稲作を見守っていただくという考え方でしょう。

このような民間の習慣が仏教の習慣と一体となったものが「花祭」、つまり灌仏会だと言えるようです。

ところで、キリスト教の行事で最も大きいものとして復活祭があります。キリストの復活を祝うもので、三月二十二日から四月二十五日の間に行なわれます。このお祭りの起源は古く古代ギリシャや古代ローマにまでさかのぼることができるところ、春分のころ、植物の死と復活の象徴である神

（古代ギリシャではアドニス、古代ローマではアッティス）の死と復活の祭礼でした。

復活祭当日の朝には卵を食べたり、きれいに色を塗ったゆで卵を贈り合ったりする習慣があるそうです。この卵も復活の象徴といういみがあるようです。



春は、冬の間枯れていた植物が再び芽吹き、花を咲かせる時期です。洋の東西を問わず、命がよみがえる季節と考えられていたことがうかがわれます。

参考文献 『日本国語大辞典』（小学館）、『日本大百科全書』（小学館）、『世界大百科事典』（平凡社）、『国史大辞典』（吉川弘文館）（ジャパンナレッジ利用）



## 祭礼・祈祷などの案内

○次回甲子祭

令和三年五月十六日（日） 午前五時～正午

○開運千人講祈祷祭 毎月一日 午前六時～正午まで

○諸祈祷受付 商売繁盛祈願、心願成就祈願、厄除け、お宮参りなど、随時祈祷を行なっております。

○お祓いのお申し込み・お問い合わせなどは次頁の電話番号もしくはメールにてお願いいたします。

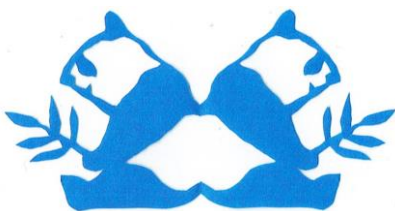
不在の場合は、恐れ入りますが、留守番電話のメッセージのあとで、お名前・お電話番号・ご用件をお話してください。のちほどこちらからご連絡いたします。





(連載まんが)

# 大吉うさぎ ～神社しいとい再び～ くまこまち 作



〈お問い合わせ・お申し込み〉

電話

〇三―三九一八―七九三〇

携帯

〇八〇―一九八七―八七二六

eメール

daikokujinja@gmail.com

次号発行予定

「だいこく通信第四十五号」、いかがでしたか。次号「夏の号」は、令和三年七月十五日の甲子祭に発行予定です。

「だいこく通信」第四十五号 令和三年三月十七日発行

編集・発行 大國神社社務所

〒一七〇―〇〇〇三 東京都豊島区駒込三―二―十一

<http://www.daikokujinja.org>